

新春所感

—白内障手術の新展開を夢みて—



日野病院名誉病院長 玉井 嗣彦

新年あけましておめでとうございます。日野病院に赴任後13度目の新春を迎えて、眼科専門医として眼科診療の一端を担わせていただいたことに、一入の感激を覚えます。

昨年末で手術開始後12年3カ月の月日が経過しましたが、その間手術室では、1208名（男性451名、女性757名、比率にして男性37.3%、女性62.7%）の主として加齢に伴う白内障手術、延べ1936件を施行しました。年齢は43歳から102歳の平均78.9歳でした。80歳以上の方は458名（全体の37.9%）で、性別では男性が150名の32.8%、女性が308名の67.2%を占めており、今日の女性優位の高齢化社会を反映する結果でした。ちなみに、当院での最高齢白内障患者は、男性で98歳、女性で102歳でした。

白内障手術患者の増加に従い、後発白内障患者も年々増加して現在226件で、手術開始後12年3カ月間の白内障関連手術件数は合計2162件を数えますが、後発白内障切開術は全て外来の特殊なカールツァイス社製のレーザー装置を用いて行い、視力の改善を得ました。

今まで、眼科では睡眠障害に加えて、うつ状態や認知機能に問題を起こしやすい患者さんを対象に積極的に白内障手術を行ってきませんでした。最近これらの症状が、白内障術後に有意かつ大幅に改善することが内外で報告され、注目されています。

うつ病の原因の一つに、460nm前後の青色可視光である「ブルーライト」不足によるサーカディアン（概日）リズムの乱れが考えられています。すなわち、若年者と違って老人になると、水晶体の加齢によるブルーライトの吸収、網膜への不十分な到達が、睡眠障害を招き、若年視力良好者の4.6%に対して、13.5%と高いうつ状態に落ち入るものと思われます。

従って、白内障手術に際して、ブルーライトを積極的に目の中に取り込む眼内レンズの開発も進んでいますが、従来の紫外線カットのみのレンズ下でも、睡眠障害が改善され、うつ状態の寛解とともに、歩行速度まで速くなった症例を、日野病院でもしばしば経験しています。その際、認知度の改善も散見されました。

ブルーライト問題がクローズアップされている今日、生体リズムの改善の上で、白内障手術に新しい展開を期待しつつ、上記の患者さん達には術後の管理の面などで、日帰り手術が困難な場合もありますので、本院では片眼で1週間、両眼で2週間前後の入院手術をお願いし、頑張っているところです。

関係各位の一層のご理解とご支援がなければ出来ない取り組みです。日野病院のより発展のためにも、今後ともよろしくお願い申し上げます。